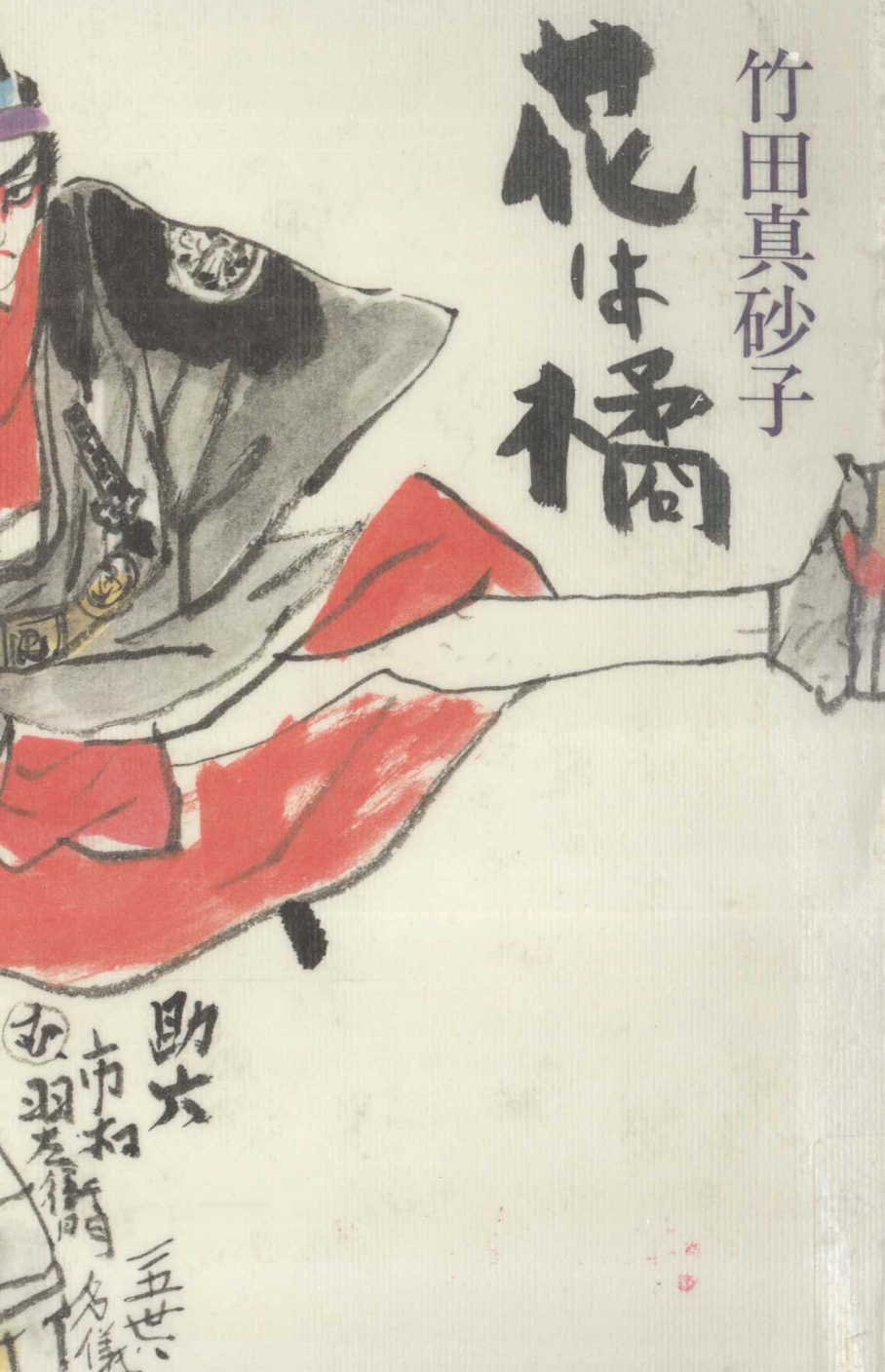
竹田真砂子

花は橘



花は橘

竹田真砂子

集英社

花は橘

一九九二年五月二五日　第一刷発行

著　者　竹田真砂子

発行者　若菜　正

発行所　株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一―五〇
編集部（〇三）三二三〇―六一〇〇
販売部（〇三）三二三〇―六三九三
制作課（〇三）三二三〇―六〇八〇

印刷所　凸版印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1992 M.TAKEDA, Printed in Japan ISBN4-08-772848-X C0093

花は橘　目次

花は橘　7
秘密ぎらい　45
あいちゃんへ　81
ずぼら　121

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ひとりぼっち 161
信州湯田中 197
舞台裏の茶会 233
あとがきにかえて

装画　村上　豊
意匠　岡　邦彦

花は橘

花は橘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

玄関の格子戸をからりと開けて、弟子の多喜蔵が、奥へ声をかけた。
「旦那、お帰り」
たすきをはずしながら女中が走り出て来て、上り框に手をつかえる。
「お帰りなさいまし」
千村多左衛門は、沓脱にそろえてある女物の革靴を見ていった。
「客かい？」
明治、大正、昭和を通じて、千村多左衛門は、歌舞伎界で花形の地位を守り通し、六十の声をきいたというのに、まだ一度も老け役をしたことがなかった。
「なんとかいう雑誌の、女記者さんでございます」
「相手をしているのかい」
千村は小指をたてた。
「お話が、はずんでいるようでございます」
女中は、主の外套と帽子を受取る。
格子戸の外に立ったままでいる多喜蔵と、顔を見合せて、千村は肩をすくめた。一瞬、鼻の穴

をふくらませたのが、多喜蔵の受け答えだった。
そこへ現われ出たのは、妻の照である。
「お帰りなさい」
女にしては骨太な体つきで、背丈も並よりは高く、四角い顔には小さな黒子(ほくろ)が沢山散らばっていた。千村は、すくめた肩を素早く元に戻して、姿勢を正した。
「御用がなければ、私はこれでおいとまいたしますが」
多喜蔵が敷居際から声をかける。
「まあ、いいじゃないか。上がって、茶でも一杯……」
引止めようとする千村の声に、傍らから照が、自分の声を重ねた。
「あら多喜蔵さん、ごくろうさま。どうぞ、構わないから引取って頂戴」
美声が評判の千村もかたなしの台詞廻しで、照女は多喜蔵を追払おうとする。
追払われた多喜蔵は、
「では、ごめんなすって」
とかなんとかいいながら、心細そうな顔つきで立っている千村を、ちらり、と見やって、格子戸を閉めてしまった。
「『令人画報』のね、深見さんって女記者さん。今日でもう四度(よたび)も見えてますの」
照は「四度」に力をこめた。
千村が自宅に戻ったのは、ほぼ一月(ひとつき)ぶり。理由は、いつもながらの女の一件である。さすがに千村は、我が家の敷居が高くて、一人では帰りづらく、いやがる弟子の多喜蔵を呼び出して無理

矢理ひっぱって来たのだが、こんなことには馴れっこになっている照女に、軽くあしらわれて、千村はあっさり、援護の兵隊を失くしてしまった。
「逢ってあげて下さいな」
「お前に用なんだろう。雑誌で、役者の女房特集でもやる気なんだろうよ」
「あたしの用はもうとっくにすんでますの。旦那に御用。楽屋ではありきたりだから、家庭にいる時の千村多左衛門に逢いたいって」
「逢って、どうするんだ」
「記事にするんでござんしょ」
「そりゃまあ、取って食おうとはいうめえが」
「あたしならともかく、旦那じゃお腹のたしになりません」
千村は痩せ型である。
「ね、逢ってあげて下さいな。あたしじゃ、もう手におえませんの」
「お前の手におえないのなら、あたしにゃあ、手も足も出ねえ」
久方ぶりの帰宅には、女房を持ち上げるのがなにより。長年の経験から割り出した、多左衛門の知恵である。
「いえ、旦那の口からいって下されば、納得しなさるでしょうよ」
いつもなら、てれかくしの機嫌とりと承知の上で、夫のおだてに乗ってくれ、あっさりと我を折る照が、今日に限って、どこまでも食いさがってくる。
「なにを、どういえっていうんだ」

「旦那は、混血児なんかじゃないってこと」
いいながら視線をそらす照にはなにも答えず、千村は、羽織の紐の形を整え、両方の袖口をぴんと引っ張って裄を揃えてから客間に入った。

普通なら応接間というところを、照女の好みで、茶室風にしつらえた四畳半の客間に、その女記者は、かしこまって座っていた。
「お邪魔しております」
首筋をむき出しにした断髪の頭をさげる。
「よござんしたね。ちょうど、たくが戻ってまいりまして」
照女は女記者にいってから、千村の方へ四角い顔を向け、
「いつもかけ違ってね、ほんとにお気の毒でござんしたの。お待たせしてばかり」
二人の間をとりなした。
主が無断で、一ヶ月も留守にしていたとは、告げていないのだろう。そんな照女の心配りを知ってか知らずか、
「あれっ、初めてじゃないね。前に逢ってるね」
千村は、紬地の座布団に座りながら、三階の立見席の隅まで届くという持ちまえの、涼しい声を張上げた。
「はい、お目にかかったことがあります。覚えていて下さって、光栄でございます」
「どこだっけね」

「楽屋。歌舞伎座の。奥役の高田さんに連れて行っていただきました」
奥役は、出演者とのパイプ役を果たす興行会社側の人物である。
「そうだ。そうだ、高田さんだ」
「わあ、私、どうしましょう。思い出していただいて、本当に感激してしまいます」
「その頭。いや失礼ながらね。ご婦人にはめずらしいからね。それにお辞儀。形がいいよ、さまになってる。で、思い出したわけさ」
「わァ、断髪にしていてよかったわァ」
深見かく子と名乗る婦人記者は、両手で頭を抱えて目尻をさげた。
初対面の時、深見は、二、三、簡単な質問をした。千村は鏡に向って顔を拵えながら答えたような気がする。そういえば、婦人向け雑誌の訪問記だとかいっていたっけ。わざわざ興行会社の社員を紹介者にして訪れたのは、一度だけの取材に終らせず、千村との繋がりを、しっかりしたものにしておきたかったからに違いない。初めの軽い訪問記は、そのための布石だろう。
「おかみさんには、初めてこちらへ伺った日から、とてもよくしていただいて。たくが戻ったら、じかに訊いてごらんなさいって。お言葉に甘えて私、何度も伺って。でも、おかみさん、いやな顔もなさらずに、帰る時は、ごめんなさいね、こんなことめったにないのだけれど、間が悪くて、と気の毒がって下さいました。三度目の正直を通り越して四度目。大願成就です。おかみさん、ありがとうございました」
年の頃は二十八、九。無邪気に礼をいう深見に、照女は人気役者の妻の気遣いと貫禄を一緒に見せて頬笑んだ。

「あなたが、あんまり熱心なのですもの」
「すみません、熱心にならざるを得なくて。これが私の職業でして。疑惑、疑問にはすぐにとびつく、とびついて真相を究明して解明する」
深見は急に真顔になった。
その疑問とは、自他共に許す江戸っ子の代表千村多左衛門の父親が、フランス人であるという噂であった。
「知る人ぞ知る。つまりは公然の秘密なのだそうですね。私は知りませんでした。で、真実を知りたいと、こちらにお邪魔して、おかみさんにお訊ねしたら、根も葉もない、ただの噂だとおっしゃる」
深見の説明を、横から照女が引取った。
「だってねえ、あんまりおかしいじゃありませんか。旦那が混血児だなんて。フランスまじりの江戸っ子なんてあるものじゃない。それじゃ江戸っ子が泣きますよ。ねえ旦那、そうですわねえ、ひどい言いがかりですわねえ」
千村は、女中が持って来た煎茶を一口すすってからいった。
「あっしがこんな、ちょっと西洋じみた顔立ちをしているからね、疑われるのも仕方がないが、あっしの父親は、池の端の金箔屋の養子でね。さてフランスの混血児のといわれてもね、あの親がその手の人間だとは、とても思えませんがね」
「はあ」
手帳と鉛筆を握りしめたまま、深見は、多左衛門の一挙手一投足に見とれている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.